

起動時間にかかわる時間関係の副詞 「すぐ（に）」「もうすぐ」をめぐる試論

安田 眞由美

A Study of "*sugu(ni)*" and "*moosugu*", the Adverb of the Temporal Relation in Connection with Starting Time

YASUDA Mayumi

Abstract

The aim of this paper is to show the new approach of descriptive research of the adverb of the temporal relation, through consideration of *sugu(ni)* and *moosugu* from a viewpoint of co-occur with the grammatical element which appears in the semantic class of a sentence. First, it is examined which grammatical element that appears in the semantic class (modality of a general situation, an individual situation, and modality of judgment, modality of utterance) of a Japanese sentence may co-occur with *sugu(ni)* and *moosugu*. As a result, in the semantic class of a sentence, it became clear that *sugu(ni)* and *moosugu* showed grammatically different behavior.

The adverb of the temporal relation has been considered conventionally from the viewpoint of length at time. Although it is a mere part of the adverbs of the temporal relation, by adding the consideration from a viewpoint of the difference in the grammatical behavior in the semantic class of a sentence, I consider whether more detailed description was completed.

0. はじめに

本稿は、文の意味的階層に現れる文法要素との共起という観点から「すぐ（に）」「もうすぐ」を考察し、時間関係の副詞研究の新たな可能性を示すものである。

まず、「すぐ（に）」「もうすぐ」は日本語の文の意味的階層（一般事態、個別事態、判断のモダリティ、発話のモダリティ）に現れるどの文法的要素と共起しうるかを考察する。その結果、文の意味的階層において「すぐ（に）」「もうすぐ」は文法的に違った振る舞いをすることを示す。

従来、時間関係の副詞は事態が成立するまでの時間の長短という観点から考察されてきた。文の意味的階層における文法的な振る舞いの違いという観点からの考察を加えることにより、時間関係の副詞がより詳細に記述できるということを述べる。

1. 先行研究

1.1 時間を表す副詞に関する先行研究（仁田 2002）

従来、時を表す副詞は、仁田（2002）に代表されるように、事態が成立するためにかかる時間の長さによって分類され、説明されてきた。

仁田（2002）では、時間に関する副詞を「時の状況成分¹⁾」と「時間関係の副詞（仮称）²⁾」に二分類し、

「時間関係の副詞」について以下のように述べている。

＜時間関係の副詞＞とは、時間の中での事態の出現や存在の展開のありようという、事態の内的な時間的特性に言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴づけたものである。(pp. 39 – 40)

このように定義したうえで、事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実現するまでの所要時間によって、これらを、＜僅少所要型＞、＜中期所要型＞、＜長期所要型＞に分けている。これらの分類は以下のとおりである。

＜僅少所要型＞とは、事態の取り掛かり・起動までに要する時間量がきわめてわずかであることを表すものである (p. 247)

＜僅少的所要型＞の例として、「急に、いきなり、突然、すぐ (に)、たちまち、さっそく・・・」などを挙げている。

＜中期所要型＞とは、事態の起動・取り掛かりまでにそれなりの一定程度の所要時間が存することを表している (p. 251)

＜中期所要型＞の例として、「ほどなく、間もなく、そのうちに、やがて、しばらくして・・・」などを挙げている。

＜長期所要型＞とは、事態が長期の時間的経過を経て、起動し実現したと捉えられていることを表している (p. 253)

＜長期所要型＞の例として、「ようやく、やっと、とうとう、ついに・・・」などを挙げている。

上に引用したように、仁田 (2002) では時間を表す副詞を、事態が発生・実現するまでの時間の長さによって分類しているほか、時間を表す副詞に現れる事態の内容として以下のようにも述べている。

「すぐ」などの起動時間に関わる副詞も、共起する事態は、起動・実現が問題にできるもの、したがって、時間的な限定性を持ち、その出現が時間の中でそれなりの明確さをもって捉えられる事態でなければならない。「彼はすぐ来る」「彼はもうすぐ社会人だ」は可能だが、「*彼はもうすぐのどが痛い」「*彼はもうすぐ背が高い」「*彼はもうすぐ且本生まれだ」は逸脱性を有している。(pp. 39 – 40)

上述からも分かるように、仁田 (2002) では、「すぐ」「すぐに」と「もうすぐ」は特に区別されることなく扱われている。

1.2 国語辞典による言葉の意味の定義

では国語辞典の中では、「すぐ」「すぐに」「もうすぐ」はどのように定義されているのだろうか。

三省堂国語辞典：	すぐ	①ほとんど時間をおかないようす。すぐに。(p.638)
広辞苑（岩波書店）：	すぐ	①ただちに。さっそく。(p.1282)
	すぐに	①時をおかずに。ただちに。(p.1283)

三省堂国語辞典にも、広辞苑（岩波書店）にも「もうすぐ」について記述が見られなかった³⁾。

三省堂国語辞典も広辞苑も「すぐ」と「すぐに」の説明について、「事態が成立するまでの時間の長さが短い」という説明をしている。そして、三省堂国語辞典では仁田（2002）と同様に「すぐ」と「すぐに」は同じ意味として扱われ、広辞苑でも大体同じ意味として扱われている。

1.3 教師と学習者のための日本語文型辞典（グループジャマシイ 1998）

教師と学習者のための日本語文型辞典（1998）ではどのように説明されているのか、見てみよう。

すぐ 時間、距離がとても短い様子を表す。時間の場合は「に」が付くこともある。
(p.148)

もうすぐ そのことが起こるまでに今からあまり時間がないことを表す。「すぐ」よりは長い時間。話し言葉でよく使われる。(p.582)

ここでは、「すぐに」は「すぐ」＋「に」であるとされ、「すぐ」と同じ意味として扱われている。

1.4 本稿の立場

1.1～1.3 まで見てきたことを参考に、本稿でも従来の説明に従い「すぐ」と「すぐに」を「すぐ（に）」と記述し、同じものとして考察を進めていくことにする。

ここで注意したいのが、日本語文型辞典の記述と仁田（2002, pp.39 – 40）で記述である。

日本語文型辞典(1998)によれば、「もうすぐ」は「すぐ（に）」と比べると長い時間であると説明され、「もうすぐ」も「すぐ（に）」と同様に、事態が成立するまでの時間が「とても」短いかなどという観点から意味が説明されている。

先行研究から見れば「すぐ（に）」は事態が成立するまでの時間が「とても」短く、「もうすぐ」は「すぐ（に）」よりは長いということである。このことは以下の例でも確認することができる。

(1) 宿題を今 {すぐ（に）／*もうすぐ} 出してください

(2) お母さん：7時よ。起きて。学校に遅れるよ。

子ども：{すぐ（に）／*もうすぐ} 起きるよ。

(1) は、先生が今から宿題を集めることを、子どもたちに言うとき「すぐ（に）」は使うことができるが「もうすぐ」を使うことができない。また (2) は、お母さんが朝、子どもを起こすときのか

け声であるが、そのかけ声に対する返事として、子どもが「今起きる」ということを伝えたいとき、「すぐ（に）」は使うことができるが「もうすぐ」は使うことができない。

ここで、もう一度確認しておく。日本語文型辞典（1998）では、「すぐ（に）」と「もうすぐ」の意味の違いについての説明は、事態が成立するまでの時間の長さが違うという指摘のみにとどまっており、仁田（2002, pp.39 – 40）では、「すぐ（に）」と「もうすぐ」は特に区別されることなく使われている。

しかし、本当に「すぐ（に）」と「もうすぐ」は事態が成立するまでの時間の長さが違うだけなのであろうか。

1.5 問題の所在

上述の（1）（2）や先行研究を見れば、「すぐ（に）」「もうすぐ」は事態が成立するまでの時間の長さが「とても短い」か「短い」かの違いのようにも見える。しかし、次の例文（3）（4）を見てみよう。

（3）彼はすぐ（に）来た。

（4）*彼はもうすぐ来た。

（3）「すぐ（に）」は動詞の過去形と共起しうるのに対し、（4）「もうすぐ」は動詞の過去形とは共起しえない。また、

（5）*すぐ（に） 3時だ。

（6）もうすぐ 3時だ。

「3時だ」のような名詞述語の場合、「すぐ（に）」は共起することができない。さらに、本来的特徴を表す「ものだ」⁴⁾との共起関係を見ると、

（7）蝉はすぐ（に）死ぬものだ。（蝉の本来的特徴）

（8）*蝉はもうすぐ死ぬものだ。

（7）「すぐ（に）」は本来的特徴を表す「ものだ」と共起しうるの対し、「もうすぐ」は共起しえないのである。

（3）～（8）から見ると、「すぐ（に）」と「もうすぐ」は事態が成立するまでの時間が「とても短い」か「すぐ（に）」よりは長い」という違いだけではなく、文法的な振る舞いが違うようである。

次章では、「すぐ（に）」と「もうすぐ」の文法的な振る舞いの違いについて文の意味的階層の観点から更に詳しく考察を進めていく。

2. 日本語の文の意味的階層に関する先行研究

日本語の文は、命題とモダリティという2つの意味的な側面から成り立っている。命題は文が伝える内容を担い、モダリティはその文の述べ方を担っている。日本語は、その意味的な違いが文構造に強く反映されるという特徴を持っており、命題レベルの要素が文の内側に、モダリティの要素が文の外側に現れる傾向がある。

命 題 モダリティ

(日本語記述文法研究会 2003, pp.1~2)

2.1 命題とモダリティの捉え方

日本語を文の意味的構造から捉える研究では、命題部分だけでなく、モダリティに関しても、これまで盛んに議論が重ねられてきた。日本語の文を意味的構成から見ると、命題に対する概念としてモダリティを捉えるという立場の研究には、奥田 (1985)、仁田 (1991)、益岡 (1991)、中右 (1994)、宮崎他 (2002)、益岡 (2007) などさまざまなものがある。しかし、現在に至るまで統一的な見解には至っていないようである。ここでは、益岡 (2007) の考え方に従い、モダリティを以下のように考えたい。

文は意味的には事態を表す領域と話して (表現者) の態度 (事態の捉え方、文の述べ方) を表す領域からなり、そのうちの後者の領域をモダリティと呼ぶ。(中略)モダリティは、したがって、文論における意味的なカテゴリーである。(益岡 2007, p.1)

また、益岡 (2007) では、「命題」を「一般事態」の領域 (P1) と「個別事態」の領域 (P2) に、「モダリティ」を「判断のモダリティ」の領域 (M1) と「発話のモダリティ」の領域 (M2) に分類し、それが文の中でどのような位置に現れるのか述べている 5)。

[M2 [M1 [P2 [P1] P2] M1] M2] (益岡 2007, p.3)

2.3 文の意味的階層と文法カテゴリー

益岡 (2007) では、文に現れる文法要素が4つの意味階層にどのように表れるのかについても述べている。それらをまとめたものが下図である。

階 層	文 法 要 素		
	主 要 部	補 足 部	付 加 部
一 般 事 態	用言の語幹 ヴォイス	格成分 (補足語)	様態・程度・量など
個 別 事 態	アスペクト テンス		アスペクト 時・場所など
判断のモダリティ	真偽判断 価値判断		「たぶん」類 「むろん」類 「あいにく」類
発話のモダリティ	発話類型 丁寧さ 対話態度		「どうか」類 「実は」類

益岡 (2007, p.21)

また、仁田 (2002) の中に以下のような記述がある。

時間関係の副詞が、結果の副詞・様態の副詞・程度量の副詞の外側で働く存在であることは、

彼はしばらくゆっくり故郷に滞在する予定だ。

しばらくはとても故郷に帰りたいかった。

柿の実はすぐ真ッ赤に熟すだろう。

などからも分каろう。時間関係の副詞「シバラク」は、様態の副詞「ユックリ」や程度の副詞「とても」を包んで現れているし、時間関係の副詞「スグ」は結果の副詞「真ッ赤二」を包み込んで使われている。(p.40)

仁田 (2002) も益岡 (2007) も時間関係の副詞は個別的事態に属すると考えているようである。本稿でも日本語の文の意味的階層を一般的事態、個別的事態、判断のモダリティ、発話のモダリティに分け、それぞれに現れる文法的要素と「すぐ (に)」 「もうすぐ」 は共起しうるか、考察を進めていく。

3. 文の意味的階層における文法的振る舞いの違い

3.1 一般事態からの考察

一般事態と個別事態とを分けるのは時空間性の有無である。要するに特定の時空間において実際に事態が起こるのか、または起こったのかに関わるものである。

(9) 赤ちゃんはよく眠る。

(10) 赤ちゃんはよく眠った。

(9) は赤ちゃんの属性について説明し、述べている文であり、一般事態であると考えられる。それに対し (10) は特定の時空間に起こった個別事態である。

次の例を見てほしい。

(11) 蝉はすぐ (に)死ぬ。

(12) *蝉はもうすぐ死ぬ。

(13) この蝉はもうすぐ死ぬ。(個別的事態)

(11) は、蝉の属性について述べた文である。蝉というものは短時間で死ぬということを表し述べており、特定の時空間に起こった事態を指し示すものではない。これに対し、(12) 「もうすぐ」 では蝉の属性を表し述べることができず、(13) のように「この」をつけることによって、「個別事態」としてのみ文が成立する。さらに他の例でも確認してみよう。

(14) 小さい子はすぐ (に)泣く。

(15) *小さい子はもうすぐ泣く

(16) この小さい子はもうすぐ泣く

(14) は小さい子の属性について述べており、「もうすぐ」 はここでも (16) のように「この」をつけることによって、「個別事態」としてのみ文が成立する。

仁田 (2002) も益岡 (2007) も時間関係の副詞は個別事態に属すると考えているようであるが、(11) や (14) のような例を見ると、「すぐ (に)」 は一般事態にも現れうる事が分かる。

3.2 個別事態からの考察

3.2.1 発話時と事態からの考察

ここではまず、時空間を発話時以前と発話時以降に分け、事態をそれぞれ単発的事態と反復的事態に分けて考える。

発話時以降に成立する単発的事態について、考えてみたい。(15) (16) を見ればわかるように「すぐ (に)」も「もうすぐ」も使うことができる。

(15) バスはすぐ (に) 来るよ。

(16) バスはもうすぐ来るよ。

発話時以降に成立する単発的事態で名詞述語の場合を考えてみたい。

(時計が2時28分をさしているとき)

(17) *すぐ (に) 3時だ。

(18) もうすぐ 3時だ。

(19) *すぐ (に) 大学生だ。

(20) もうすぐ大学生だ。

(17) (19) のような名詞述語の場合、「すぐ (に)」を使うことができないのに対し、「もうすぐ」は問題なく使うことができる。(17) (19) の意味を変えないで、名詞述語を動詞述語にしてみよう。

(時計が2時28分をさしているとき)

(21) すぐ (に) 3時になる。

(22) もうすぐ 3時になる。

(23) すぐ (に) 大学生になる。

(24) もうすぐ大学生になる。

(22) (24) 「もうすぐ」の方が自然であると感じるが、(21) (23) は(17) (19) と比べると許容度が上がる。

では、発話時以降に成立する反復的事態についてはどうだろうか。次の例を見てもらいたい。

(25) バスは(この時間) いつもすぐ (に) 来るよ。

(26) *バスは(この時間) いつももうすぐ来るよ。

(27) 山田さんはいつもすぐ (に) 泣く。

(28) *山田さんはいつももうすぐ泣く。

(25) (27) の「すぐ (に)」は問題なく使えるのに対し、(26) (28) 「もうすぐ」は座りの悪い文だと感じる。このような状況の場合、単発的事態としての発話

(28) 山田さん、もうすぐ泣くよ。

の方が適切であると感じる。さらに別の例でも検証してみよう。

(29) パパは家に帰ると、毎日すぐ (に) お風呂に入る。

(30) *パパは家に帰ると、毎日もうすぐお風呂に入る。

パパの反復的行為(この場合は日常的習慣)について述べる文である。「すぐ (に)」は問題なく使うことができるが、「もうすぐ」はかなり使いづらいと感じる。

次に、発話時以前に成立した単発的事態について見てみたい。

(31) バスは昨日、すぐ（に）来た。

(32) *バスは昨日、もうすぐ来た。

(33) 山田さんは昨日、すぐ（に）泣いた。

(34) *山田さんは昨日、もうすぐ泣いた。

(31) (33) は「すぐ（に）」が問題なく使えるのに対し、(32) (34) の「もうすぐ」は不適切であることが分かる。

発話時以前に成立した反復的事態について見てみよう。

(35) 子どもの頃、お金をもらうと、いつもすぐ（に）お菓子屋さんに行った。

(36) *子どもの頃、お金をもらうと、いつももうすぐお菓子屋さんに行った。

(35) では「すぐ（に）」を使うことができるが、(36) では「もうすぐ」は使うことができない。

3.2.2 みとめ方（否定）からの考察

みとめ方（否定）は益岡（2007）によると内部否定型と外部否定型⁶⁾に分けられる。内部否定型とは動詞の活用形などに現れる（来る－来ない）（来た－来なかった）形であり、一般事態にも個別事態にも属するものである⁷⁾。

「すぐ（に）」「もうすぐ」は否定形と一緒に使うことができるのであろうか。次の例を見てもらいたい。

(37) 彼はすぐ（に）来ないよ。（さっきの電話で家にいるって言っていたからね。）

(38) *彼はもうすぐ来ないよ。（さっきの電話で家にいるって言っていたからね。）

(39) 雨はすぐ（に）降らないよ。

(40) *雨はもうすぐ降らないよ。

(37) (39) 「すぐ（に）」は否定形と共起できるのに対し、「もうすぐ」は否定形とは共起できない。

3.3 考察のまとめ

(11) ～ (40) の考察の結果は以下のとおりである。

① 「すぐ（に）」は一般事態にも現れうることができるが、「もうすぐ」は個別事態にのみ現われる。

② 発話時と事態の観点からみると、「すぐ（に）」は名詞述語文を除いて、発話時の前後、事態が単発的なものか反復的なものかに関わらず、現れることができるが、「もうすぐ」は発話時以降に成立する単発の事態にしか使えない。

③ 「すぐ（に）」は否定形と一緒に使うことができるが、「もうすぐ」は否定形とは共起しない。

ここでの考察から、「すぐ（に）」は、一般事態か個別事態か、や発話時以降か以前か、単発的出来事か反復的出来事かに関わらず、動詞が表す事態が成立するまでの時間が短いことについて、述べる時間関係の副詞であることが分かる。それに対し、「もうすぐ」は発話時以降に成立する個別的な単発の出来事についてのみ、使われる時間関係の副詞であることが分かる。

この章で考察した結果を以下の表に示す。

(41)

	一般的事態	個別的事態
すぐ (に)	○	○
もうすぐ	×	○

(42)

	発話時以降			発話時以前		否定
	単発の事態 (動詞述語)	単発の事態 (名詞述語)	反復の事態	単発の事態	反復の事態	
すぐ (に)	○	×	○	○	○	○
もうすぐ	○	○	×	×	×	×

3.2 判断のモダリティからの考察

判断のモダリティとは「当該の事態（命題）に対する話し手（表現者）の判断を表すモダリティ（益岡 2007, p.135）」のことである。益岡（2007）では、判断のモダリティの下位類としては真偽判断のモダリティと価値判断のモダリティが設定されている。ここで益岡（2007,p.20）の記述に注目したい。

価値判断のモダリティの対象となるのは一般事態であり、真偽判断のモダリティの対象となるのは個別事態である。（益岡 2007, p.20）

3.1 での考察と（41）の結果から、次の予測を立てることができる。

「すぐ（に）」は一般事態にも個別事態にも使われることから、真偽判断のモダリティを含む文にも価値判断のモダリティを含む文にも現れることができる。それに対して、「もうすぐ」は個別事態にしか使われないことから、真偽判断のモダリティを含む文には現われうるが、価値判断を含む文には現われえない。

この予測を 3.2.1、3.2.2 の考察で確かめてみよう。

3.2.1 真偽判断のモダリティからの考察

益岡（2007）では、真偽判断のモダリティを「断定－非断定」の2項対立でとらえ、次のように考える。

真偽判断のモダリティとは「当該の事態が成り立つかどうかの真偽性を表すモダリティのことである（益岡 2007, p.135）」

先ほどの予測では、「すぐ (に)」も「もうすぐ」も真偽判断のモダリティを含む文には現われるというものであった。ここにあらわれる文法形式は、無標形式か「だろう、たろう、よう、まい、かもしれない、にちがいない、はずだ、・・・」などである。具体的に考察していく。

【だろう】

(43) 彼はすぐ (に) 来るだろう。

(44) 彼はもうすぐ来るだろう。

【かもしれない】

(45) 彼はすぐ (に) 来るかもしれない。

(46) 彼はもうすぐ来るかもしれない。

【はずだ】

(47) 彼はすぐ (に) 来るはずだ。

(48) 彼はもうすぐ来るはずだ。

(43) ～ (48) から見ると、真偽判断のモダリティを表す文法形式と「すぐ (に)」「もうすぐ」は問題なく共起することができる。

3. 2. 2 価値判断のモダリティ

益岡 (2007) では価値判断のモダリティを「現実像－理想像」という 2 項対立で捉え、「当該の事態が是認されるかどうかの妥当性を表すモダリティのことである (p.135)」としている。

ここであらわれる文法形式は「べきだ、ほうがよい、ればよい、なければならない、てはいけない、しかない、のだ、ものだ、ことだ・・・」などがある。先ほどの予測では、「すぐ (に)」は現われえるが、「もうすぐ」は現われないというものであった。具体的に見ていこう。

【～た方がよい】

(49) すぐ (に) 帰った方がよい。

(50) *もうすぐ帰った方がよい。

【～てはいけない】

(51) すぐ (に) 帰ってはいけない

(52) *もうすぐ帰ってはいけない。

【～なければならない】

(53) すぐ (に) 帰らなければならない。

(54) もうすぐ帰らなければならない。

(49) ～ (54) を見ると、「すぐ (に)」はどの語とも共起しうるのに対し、「もうすぐ」は共起しにくい。

(54) は問題なく共起できるようである。どうして、【～なければならない】は「もうすぐ」と一緒に使うことができるのかについては、考察の余地があると思われるが、ここでは現象の指摘のみにとどめる。

次の例を見てほしい。

【ものだ】

- (55) 蝉はすぐ (に) 死ぬものだ。(本来的特徴)
 (56) *蝉はもうすぐ死ぬものだ。
 (57) 子どもはすぐ (に) 大きくなるものだ。(当為)
 (58) *子どもはすぐ (に) 大きくなるものだ。

「ものだ」は益岡・田窪（1992）が述べるように、対象の本来的特徴を述べることを基本とし、この本来的特徴が望ましいものである場合には、当為の意味になる。(55)～(58)を見ると、「すぐ(に)」は「ものだ」と共起し、「ものだ」が本来持っている対象の本来的特徴や当為を表す文に現れることができる。それに対して、「もうすぐ」は「ものだ」と共起することができない。

3.2.3 判断のモダリティからの考察のまとめ

この章で考察した結果を以下に示す。

- ①真偽判断のモダリティを含む文には「すぐ (に)」も「もうすぐ」も現われることができる
 ②価値判断のモダリティを含む文には「すぐ (に)」は現われることができるが「もうすぐ」は現われない。考察の結果を表 (59) に示す。

(59)

	真偽判断のモダリティ	価値判断のモダリティ	
		なければならない	そのほかの語
すぐ (に)	○	○	○
もうすぐ	○	○	×

3.3 発話のモダリティからの考察

発話のモダリティとは、表現・伝達にかかわる話し手の態度を表すものであり、発話類型のモダリティ、丁寧さのモダリティ、対話態度のモダリティという3種のカテゴリーを認めている。(益岡2007, p.74)

3.3.1 発話類型のモダリティからの考察

益岡（2007）で述べられている発話の類型は「演述型・情意型・疑問型・要求型・感嘆型」の5類である。演述型とはいわゆる「叙述、述べたて、平叙文」に当たるものである。情意型とは意志や感情表出を表し、疑問型とは相手の情報を求める文、要求型は相手の行為を要求する文、感嘆型とは話し手の感情を表出する文である。

ここでは、それぞれの発話の類型と「すぐ（に）」「もうすぐ」との共起関係を見ていく。

【演述型】

- (60) 彼はすぐ（に）来る。
- (61) 彼はもうすぐ来る
- (62) *彼はすぐ（に）大学生だ。
- (63) 彼はもうすぐ大学生だ。

【情意型】

- (64) すぐ（に）帰ろう。
- (65) *もうすぐ帰ろう。
- (66) 疲れているから、すぐ（に）寝たい。
- (67) *疲れているから、もうすぐ寝たい。

【疑問型】

- (68) すぐ（に）帰りますか？
- (69) *もうすぐ帰りますか？
- (70) すぐ（に）寝たい？
- (71) *もうすぐ寝たい？

【要求型】

- (72) すぐ（に）来てください。
- (73) *もうすぐ来てください。
- (74) すぐ（に）行け！
- (75) *もうすぐ行け！

【感嘆型】

- (76) すぐ（に）来たねえ！
- (77) *もうすぐ来たねえ！

(60)～(77)を見ると、「すぐ（に）」は(62)名詞述語を除くすべての表現類型に現れうるのに対し、「もうすぐ」は演述型のみである。つまり、「もうすぐ」は述べたての文には使えるが、他者への働きかけを表す文には使うことができないということである。

3.3.2 発話のモダリティからの考察のまとめ

「すぐ（に）」は名詞述語を除くすべての表現類型に現れ、聞き手に対して何らかの働きかけをすることも可能である。それに対して「もうすぐ」は演述型、いわゆる述べたての文にしか現われることができず、聞き手に対する働きかけという機能を持たない。

考察の結果を以下の表(78)に示す。

(78)

	演 述 型		情意型	疑問型	要求型	感嘆型
	(動詞述語)	(名詞述語)				
すぐ (に)	○	×	○	○	○	○
もうすぐ	○	○	×	×	×	×

4. まとめ

本稿での考察結果を以下の表でもう一度確認しておく。

(41)

	一般的事態	個別的事態
すぐ (に)	○	○
もうすぐ	×	○

(42)

	発話時以降			発話時以前		否定
	単発の事態 (動詞述語)	単発の事態 (名詞述語)	反復的事態	単発の事態	反復的事態	
すぐ (に)	○	×	○	○	○	○
もうすぐ	○	○	×	×	×	×

(59)

	真偽判断のモダリティ	価値判断のモダリティ	
		なければならない	そのほかの語
すぐ (に)	○	○	○
もうすぐ	○	○	×

(78)

	演 述 型		情意型	疑問型	要求型	感嘆型
	(動詞述語)	(名詞述語)				
すぐ (に)	○	×	○	○	○	○
もうすぐ	○	○	×	×	×	×

考察結果 (41) (42) (59) (78) から以下のことが明らかになった。

- ① 「すぐ（に）」は一般事態にも個別事態にも現れ得るのに対し、「もうすぐ」は個別事態にのみ現われる。
- ② 「すぐ（に）」は名詞述語文を除いて、発話時や単発的事態反復的事態に関わらず、動詞が表す事態が成立するまでの時間が短いことについて、述べる時間関係の副詞である。それに対して、「もうすぐ」は発話時以降に成立する単発の出来事についてのみ、使われる時間関係の副詞である。
- ③ 「すぐ（に）」は否定形と一緒に使うことができるが、「もうすぐ」は否定形とは共起しない。
- ④ 「すぐ（に）」は真偽判断のモダリティを含む文にも価値判断を含む文にも現れうるのに対し、「もうすぐ」は真偽判断のモダリティを含む文のみに現れる。これは、「すぐ（に）」が一般事態にも個別事態にも現れるのに対し、「もうすぐ」が個別事態にのみ現われるということと関係している。
- ⑤ 「すぐ（に）」は名詞述語を除く、すべての発話類型のモダリティに現れえるのに対し、「もうすぐ」は演述型の文のみに現れる。つまり、「もうすぐ」は他者への働きかけの意味を持つ文では使えないのに対し、「すぐ（に）」は他者への働きかけの意味を持つ文にもよく使われる。このことは「すぐ（に）」が名詞述語文と共起しえないことと関係がある。

以上の結果から「すぐ（に）」と「もうすぐ」の持つ意味を以下のように説明することができる。

「すぐ（に）」：一般事態、個別事態、発話時に関わらず、動詞が成立するまでの時間が短いことを表す。
他者への働きかけの意味を持つ文にもよく現われることから、名詞述語文とは共起しにくい。

「もうすぐ」：個別事態にのみ現われ、発話時以降に成立する単発的な出来事を表す。他者への働きかけの意味を持つ文には現われない。

5. おわりに

従来、時間関係の副詞は事態が成立するまでの時間の長短という観点から考察されてきた。本稿では、文の意味的階層に現れる文法要素と「すぐ（に）」「もうすぐ」との共起という観点からの考察を試みた。

文の意味的階層におけるそれぞれの文法的な振る舞いという観点からの考察を加えることにより、時間関係の副詞のうちのほんの一端ではあったが、より詳細な記述ができたのではないかと思う。このような観点からの考察が、今後、時間関係の副詞の詳細な記述研究に役に立つ可能性を示した。

<注>

- 1) 仁田(2002)では、「時の状況成分」について、時間軸上における事態の出現・存在位置を指し示すものであるとし、「午前十時」「今日」「最近」などを挙げている。詳しくは仁田(2002)参照のこと。

- 2) 仁田(2002)では「時間関係の副詞」という名称を仮称としている。
- 3) 「もうすぐ」は一語として扱われておらず、辞書には載っていない。
- 4) 益岡・田窪(1992, p.123)に「「ものだ」は対象の本来的特徴を述べることを基本とする」とある。
- 5) 文の意味的構造についてはこれまで様々な先行研究で述べられている。ここでは益岡(2007)のもののみ紹介し、詳しくは触れない。
- 6) 益岡(2007)では否定表現(みとめ方)を「内部否定型」「外部否定型」に分け、「来ないー来なかった」のように否定の形式「～ない」が述語の内部であらわれる型を「内部否定型」とし、「来たのではない」「来たわけではない」のように「の(だ)」「わけだ」などの形態を介在させることにより「～ない」が述語の外部に現れる型を「外部否定型」としている。詳しくは益岡(2007)を参照のこと。
- 7) 益岡(2007, P41)に、「内部否定型」は肯定命題に対する否定命題という事態のあり方のレベルのとどまるもの、つまり、命題の階層における否定表現であり、一般命題の階層における否定と個別命題における否定のいずれもあり得るという記述がある。

<参考文献>

- 奥田靖雄(1984)「おしはかり(一)」『日本語学』3-12, pp.54-69, 明治書院
- 奥田靖雄(1985a)「おしはかり(二)」『日本語学』4-2, pp.48-62, 明治書院
- 奥田靖雄(1985b)「文のさまざま(1)文のこと」『教育国語』80, pp.41-49, むぎ書房
- 奥田靖雄(1986)「文のさまざま(2)まちのぞみ文(上)」『教育国語』85, pp.21-32, むぎ書房
- グループ・ジャマシイ編著(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』p.148, p.582 くろしお出版
- 見坊豪紀ほか編(2001)『三省堂国語辞典』第五版 p.639 三省堂
- 杉村泰(2004)「蓋然性を表す副詞とモダリティ形式」『名古屋大学言語文化論集』25-2 pp.99-111, 名古屋大学大学院言語文化研究科
- 新村出編(1983)『広辞苑』第三版 p.1282, p.1283 岩波書店
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(1993)「現代語の文法・文法論」『日本語要説』ひつじ書房
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説ー日本語の記述文法を目指してー』くろしお出版
- 仁田義雄(2002)『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法ー改訂版ー』くろしお出版

